小学校入学直前の幼稚園の生活（一）

お茶の水女子大学
幼児保育研究室

小学校入学直前、つまり、幼稚園の五歳児三学期の一月、二月、三月は、幼児にとって、最も充実した時期のようである。そう考えてよいような場面を、私どもはしばしば経験する。幼稚園にも十分に慣れ、友だちとも遊べるようになり、仲間の中での遊びが面白くてたまらなくなってくる。自分から遊びをみつけて、大胆に振舞えるようになるのもこの時期である。

警戒しながら、用心深く、幼稚園生活の中に入ってきた子どもも、この時期には見違えるほど幼稚園の生活にはまりこんでしまうのが普通であろう。

四歳から五歳への、いろいろの経験の積み重ねもある。子どもたちは、幼稚園で、大たいどんなことが起こるのかの見通しもある。その中で、自分たちが参加して何か大きなものをつくり上げていく喜びや期待も知っている。しかも、その中で新しい発見や、新しく取り組まねばならぬ問題にぶつかる。

これから小学校へと進んでいくこの時期に、幼稚園の生活はどのようなものであったらよいのか。これまで積み上げてきた幼稚園生活の最後の時期として、この時期をいかにして充実したものとするかは、幼稚園の現場の人々にとって共通の課題であろう。また、幼児期から児童期へと移りゆく発達の問題としても、重要な課題である。

これからここに掲げるものは、昭和四十五年度の五歳児の二学期、三学期に、お茶の水女子大学附属幼稚園の山の組（堀合文子教諭）の生活を、観察記録によって示そうとするものである。

なまの記録をそのままに示す部分と、簡略化したものと、考察や解釈を加える部分とある。実際に動いている現場を、文字で示

すことには、多くの困難がある。また、観察記録でとらえることのできるものは何であるかという根本問題もある。これらの困難な問題の自覚の上に立って、できるだけわかりやすく、また、事実をとらえて、幼稚園の生活を示してみたいと思う。

一、女の子だけの劇遊びに、男の子も加わる

三学期の初めから、女の子が主になってシンデレラの音楽劇をしている。ほとんど毎日、保育室の中央部を占めて、レコードをかけて、それに合わせて女の子たちがおどる。言葉はあまり使わない。お面や、小道具や、いろいろのものを作って、いろいろの人物になる。二十名くらい加わっている時もあるし、数名の時もある。午前中はほとんどだれかが劇をしている日がつづく。

ある日には、それは低調にみえることもあり、ある日にはさかんになる。見ている側からいっても、もう少しこうなればいいのにと思うような時もある。ところが、別の日にはその問題は解消して、先に進んでいる。男の子の参加のことも、このような問題の一つである。

シンデレラの音楽劇には、なぜ、男の子は参加しないのだろうか。これは観察していたものにとって、疑問でもあり、興味でもあった。ところが、三月八日には、男の子がみごとに参加している。先生が特別にさそいかけたこともなさそうである。無理したり、あやつったりした気配は少しもない。一日だけ訪問して見学した人には、どうして、もっとさそわないのだろうという疑問が起きたかもしれない。しかし、時間をかけて、音楽劇が経過していくうちに、（その中には、目に見えない形で、先生の指導がこまやかにある）男の子も参加する。

（津守　真）

三月八日　S夫の「お面作り」と劇あそび

九・二〇

① S夫、立ったまま、「花さかじいさん」の絵本を見ている。（女児数人、シンデレラの劇遊びを始める。レコードがかかる）本をとじ、足をすって室内を歩いたりままごとコーナーへ行く。

② 小走りに材料だなのところへ画用紙をとりにいき、引きだしからクレヨンとはさみをもってきてすわる。

③ 画用紙を頭にあててから形をかき、立ち上がりはさみで切る。先生のそばへいき助言を得て、ゴムひもをたくさんつなげる作業をしながら、室の中央の、シンデレラ劇遊びをチラチラ見る。

九・四七

④ できあがった小鳥のかぶりものをかぶって、両手で羽の動作をしながらシンデレラ劇のそばを通過する。（宮殿のダンス場面）

S夫は、このあと続いて、同じように黒ネコとニワトリのかぶりものを作る（記録省略）

劇遊びはグループが散ったが、先生が入り少人数ながら続いている。S夫は作った作品を三つそろえてピアノの上におき、男児数人と色紙に名前をかく活動へ移る。

一〇・五五

⑤　先生と女児数人がねむり姫の劇あそびの準備を始めると、S夫は「それじゃあ、みなさん（男児）さようなら。ワシは悪いおばあさんになるぞ」といいながら、クレヨンを片づける。

⑥　女児が、黒いきれを渡すと、頭からかぶる。（男児たち、「見ようか」といい正面のいすにすわる）

⑦　黒いきれをかぶったS夫は、観客になっているM夫に、「おまえは、くらげになれ」と声をかける。M夫も応じて、二人で笑いあう。

⑧　レコードがかかり劇が始まる。

くり返しあそんでいるうちに、へやへ帰ってきたK夫や、カメのかぶりものをかぶったH夫も劇にスッと入る。K夫が入っているのをみて、指をさして笑ったM夫も加わる。

「大きな大根するものこの指とまれ」というS夫の声に子どもたちは準備を始め、「大きな大根」の劇が始まり、次には「ちびくろさんぼ」、続いて「花咲かじいさん」といろいろな劇あそびが展開する。

☆　☆　☆　☆　☆

この記録では、細かく書き表わせなかったが、はじめのお面作りでは、S夫は、役割をとるというように積極的に参加をしているのではないが・材料だなと机の往復でのレコードにあった足の動き、リズミカルなからだの動きは、心の中で音楽劇に参加していることを示している。・③の製作をしながら劇あそびを見るという行動・④の行動などでは、さらに積極的に劇遊びに参加する過程である。この「かぶりものを作る」という活動の過程と劇遊びとのかかわりあいの変化は興味深く思われる。後半、S夫が役割をとって劇遊びに参加したことから、ほかの男児たちも加わり、この劇遊びは発展する。

一見すると参加していなかったように思われる男児たちも、ほかの活動をしながら、たとえば、絵をかきながらレコードに合わせてハミングをする。手拍子をたたいたり、声をかけたりするなどの形で劇に参加している。一つのへやの中で異なったいろいろなあそびが展開する中で、お互に関係しあって発展し、そこにある、すなわち、開かれたいくつかの集団が大きな集団を作っているという状況は、大変望ましく思われた。（松井とし）

S夫は作ることの好きな子どもで、この日も製作から劇遊びに円滑に参加している。次の記録のT夫とE夫は、もっと劇遊びの周辺部にいて、何度か、近づいたり離れたりしながら参加した例

である。（津守）

三月八日　E夫とT夫が劇遊びに加わる過程

九・四〇

E夫とT夫が部屋のすみの机のところにこしかけて、何か話をしている。何をしたらよいのかはっきりしないが、からだを動かしてみることによって、何か遊びに出会えることを期待して動いている様子である。

へやの広い部分は、劇遊びの子どもたちが使っている。劇が始まると、E夫とT夫は劇の方に向けておいてあったいすにこしかける。こしかけていても、いすを動かしたり、立って歩きまわったりして落着かないが、劇に目を向けている時は、とても熱心に見いっている。劇の登場人物の扮装を指さして、「あれっ、いじわるかあさん、ようせいじょ」などと話している。

庭で遊んでいた子どもがさそいにきて、ちょっと外に行くが、すぐにもどってきて、いすにすわる。

劇を見ていて、劇をしている子どもにE夫が「このやろう」といったり、何か二人で、劇に向かって文句をいっている。しかし、E夫の足は、ばたばたと動き出している。二人とも劇に参加したい様子である。

E夫は立って、劇の場の中に入りこんでいって、劇をしている子の一人に、わざとぶつかる。その子が「いたいわね」というと、「おまえだって、やったんだぞ」といって、また、劇のあたりをうろうろしている。また劇をしている子が「くやしい」というと、E夫は「こっちだって、くやしいんだよ。このやろう」と、おこったようにいう。

やがてT夫は外へ出て行く。E夫も少しあとから外に出て、T夫といっしょになる。外では、最初二人で砂のかけあいを少しして、その後、ニワトリの入っている白いさくを見つけ、その中に入ったり、T夫を追いかけて、つかまえてさくの中に入れるという遊びを発見してやっていた。このさくのまわりに、山の組の男の子五～六人が集まって仲間はふえたが、E夫の追いかけるのは主にT夫であって、ほかの子たちがこのさくの内外で遊び出すと、二人は、このさくでの遊びからぬけ出した。

二人は手をつないで、ブランコに行く。ほかに二人いっしょにきて、四人で、鉄棒や、ブランコにさわってみている。そこで、『たかおに』をすることになって、ジャンケンをする。『たかおに』は、すべり台や、庭のまん中の木のまわりや、バラのたなのところや、さっきの白いさくや、砂場や、ままごとの家の中など、園の庭いっぱいに、自由に高いところをみつけてやっていた。

一一・一六ごろ

T夫が「ぼくやめた」というと、E夫も「やーめた」といって、四人ともへやに入る。外で活動していたせいか、へやに入ると、すぐに画用紙とマジックをもってきて、次の活動の準備をする。マジック、紙を机の上において、四人がいすにすわったすぐそばに、劇遊びが展開している。T夫は、手もとの紙やマジックには時々気がついたように手をつけてみるが、すぐに劇の方に見入る。

一一・三三

劇が一とおり終わった時、T夫のとなりの子が「ちょっと、ぼくもやるから」といって立つ。先生が「ぼくも入れてくださいって」というと、となりの子の行動と、それを認めた先生の言葉に勇気づけられたように、T夫が「ぼくもやる。これはあとで」といって立ち上がる。E夫は「あとでやるなんて、いけないんだよ」といって、すぐには立ち上がらないが、まもなく「おれもやっぱり、あとでやろう」と立ち上がって劇に加わる。

T夫は劇の人たちの中でうろうろしているが役が得られなくて、一度机のところにもどってくる。もう一度、劇の中にもどってトラの役を得る。E夫がT夫のトラのしっぽをつけてあげる。

「先生、今度は、チビクロサンボ」という声がして、「チビクロサンボ」が始まる。T夫は、うれしそうに出番を待っている。E夫は、役はないがT夫のそばにすわっている。出番になると、T夫は、自分の場を得て満足な様子で演じる。E夫はT夫について動いている。

T夫の扮したトラがかさをもらうと、E夫はかさを、T夫のしっぽといっしょにもって、ついて走りまわる。

「チビクロサンボ」が終わると「こんど、シンデレラだ」という声が出た。すると、T夫は「ぼく、シンデレラ」といって、手をあげる。結局、劇は「花咲かじいさん」になって、T夫の役はなかったが、いっしょに歌ったりして、劇に加わって満足な様子である。E夫もT夫のとなりで見ている。

☆　☆　☆　☆　☆

九時四十分から十一時五十分までの、E夫とT夫の動きを追ってみたが、二人は、へやの広い部分を使って展開している劇遊びに、かなり心をひかれながら動いていた。そして、へやの中では劇遊び以外の活動に入ることに困難を感じて外へ出て行ったようだ。外ではかなり自由に動いていた。

しかし、再びへやに戻った時には、やはり劇が気になっていた。T夫自身は、動き出すきっかけがみつからなかったが、となりにいた子が思いきった動きで劇に加わっていったので、この機に劇に加わることができた。T夫とE夫は、朝から劇に加わりたかった様子であったので、この加わる瞬間に、どっと全身のエネルギーが出されたような感じがした。（秋間直美）

「加わる瞬間に、どっと全身のエネルギーが出されたような感じがした」ほどに、この二人の男の子の参加した瞬間は、この子どもたち自身にとって、意義のある体験であったに違いない。参加するようにいわれて参加したのとは違う。自ら進んで一歩をふみ入れた決定的な瞬間がある。（津守）

二、戸外で美しいものにひきつけられる体験

室内では劇遊びを中心とした活動が行なわれている一方、戸外では、一日中をほとんど庭で過ごしている子どもたちがある。この子どもたちも、また別の日には、劇遊びに参加する子どもたちである。この日には、戸外で美しい氷片にひきつけられて過ごす時間がある。幼児に欠くことのできない、精神的体験である。

三月八日　真四角な氷片を作ってみよう

一〇・一〇～一〇・二五

風は冷たいがよく晴れている。I夫は、A夫、Y夫とお気に入りの「宇宙エースごっこ」をしていた。

先生が出てきて、石畳の上にちらばっている氷片に気づき、しゃがみこんでいじり始めた。子どもたちが寄ってきて、いっしょに氷をつまんでみる。I夫、A夫、Y夫らも、手にしていたフープの輪（シルバーリング）をおいて、のぞきこんでいる。先生が、マンホールにはまっている鉄格子の上に氷片をのせてみる。

先生「こうやっておいとくとね」

A夫「とけちゃう」とどなってからだをのり出す。

先生は笑って「そうなの。氷はね」先生が、格子の上にのせた氷片をそっと指で押してみる。見ていた子どもが、「できた」と叫ぶ。

先生「できた、できた、ホラ、こんなに四角いのが」先生は楽しそうに笑う。子どもたちはめいめいに、薄いのや厚いのを手にとってみて、四角の氷を作ろうとし始めた。

先生は、「ここは四角い氷の製造工場」といいながら、子どもたちといっしょに、氷片を格子の上に並べていたが、ほかの子どもによばれて立ち去る。

子どもの群も散らばって、A夫、Y夫、G夫らは「宇宙エースごっこ」にもどる。I夫も、一応はシルバーリングを手にもってかまえるが、すぐにそれをおいて、氷のところにしゃがみこんでしまった。

マンホールのふたのところでは、ほかの組の子どもが三名ほど、氷をいじっている。

I夫は、いっしょにしゃがむが、すぐ立ち上がって「おい」と、A夫らに呼びかける。また、しゃがみこんで、四角い氷を作るのをのぞき込み、すぐ立ち上がって、A夫らの方へ二、三歩、歩きかける。が、すぐもどってきて、またしゃがむ。

I夫としては、A夫らの遊びも気になるが、氷をいじってみたい気持ちの方がより強いようだ。しかし、どこかにためらいがあるらしく、のばしかけた手が宙にとまりがち。時々、そっとさわってみる。もう一度、立ち上がって、フラフラとA夫たちの方へ行こうとするが、またしゃがみこんで、今度は、しっかりと氷片をつまみ上げた。それを持ち上げてちょっと眺め、もっとうすいのと取りかえる。そして、それをそっと格子の上においた。I夫は、自分一人でも、真四角なきれいな氷を一つ、作ってみようという決断をしたらしい。

I夫「これぼくのだよ」「お楽しみだなー」と、誰にともなく語りかける。

A夫たちが、シルバーリングをかまえて「バルダンがいない」と叫んでいる。バルダンはI夫の役割であったが、I夫は、一心に氷を見つめていて、ふり向こうともしない。

もう一度「これ、僕のだよ」とくり返す。I夫は今、完全に氷のとりこになっている。I夫の中に、真四角で、すきとおった美しい氷片のイメージがあるらしい。ちょっと、からだの位置を変えながら、「もうちょっとこっちから」と氷片を静かにずらす。さっき、先生たちが作った四角い氷片が落ちている。I夫は、それをつまんでちょっと見つめ、ピョイと下におく。

「これぼくのだよ」I夫はもう一度、くり返しながら、氷の上を指で四角くなぞる。なぞるのをやめて、じっと見ている。

真四角な氷が、格子の形にはまって、カチンときれいに割れる瞬間を、じっと待っている様子である。しかし、その瞬間はなかなか、やってこない。I夫は、また、氷片を持ち上げてみた。「これ、できないじゃない」そばにいたM夫が、「よし」と、その氷を受けとり、格子の上に押しつける。あまり強く押したので、氷が格子の間から落ちてしまった。

I夫「みんなできなくなっちゃうよ」と抗議めいた口調でいいながら立ち上がって、足もとを見る。またしゃがみこんで、もう一度、大きな氷片を格子の上においた。

I夫「これで、できるかな」ちょっと、押しつけてみて、持ち上げる。ほぼ四角に割れるが、少しいびつである。I夫は、手のひらにのせて、ゆがんだ四角形を見つめ、片方の手の指で、それをゆっくりいじる。「やっぱり、真四角にはならないのかなー」という表情。ゆっくりと、斜めの辺をいじる。

I夫は、ヒョイと顔を上げた。氷をパッと落とすと、フープの輪（シルバーリング）を持って、A夫たちの方へかけて行った。短い時間を、自分なりに集中して過ごしたあとの、サッパリとした表情である。（本田和子）